

軍馬

と
短歌かわの
河野 裕子

NHK学園の短歌の添削を担当したのは、昭和六十一年か六十二年ころからだったように思う。二十余年を多くの方の作品を読み、赤ペンを自分なりに精一杯走らせてきた。向いあつていれば、ひとことですむ事が、添削になると容易ではなくなる。本音を言うと、添削をしているよりも、自分の歌を作っている方がよほど楽なのである。他人の歌に朱を入れるのは、やはり憚られるから。

長いあいだ、ずっとわたしの添削を受けてくださった方が何人もあり、お会いしたことはないが、その方々とは二十余年も人生を伴走したような気がする。お名前も字も詠風も生活の哀歎も、たった一枚の詠草用紙のやりとりの中から、自ずからわかってくるから。

殊に印象に残っているのは、池野庄一郎さんである。ほとんど毎回、軍馬の歌を出され続けた。軍馬と寝食をともし、もの言わぬ相手であるだけに、人間よりもなおいっそう親身な愛情で結ばれるものだと思う。動物好きのわたしは、池野さんの軍馬の歌を、ほぼ二十年間読みつづけてきたことになる。馬のなまえば確か、「竹可」だったと思う。

あし撃たれ動けぬ愛馬見捨てしになおもいざりてわれを慕ひぬ

このままに残してゆくは無慈悲かと銃を向けれど引鉄引けず
持てる餌すべてを与え前髪を遺品と切りて一氣に駈けぬ
三首だけあげておくが、読むたびに胸が痛む。軍律では傷つ
いた軍馬は殺すことになっていたというが、池野さんにはでき
なかつた。戦争が終わって六十余年がたつても、軍馬のことが
忘れられない。池野庄一郎さんは生涯この馬のことを忘れるこ
とができないだろう。だから、せめて歌に詠み続けることに
よって自分なりの鎮魂をされたのではないかと思う。

京都のカルチャーの講師も二十年余つづけたが、開講してほ
どない頃、七十歳を過ぎた男性が入って来られた。奥村松蔵さ
んというお名前だった。三年くらいしたとき軍馬の歌を出され
た。

英霊は祖国に還れど従き征し軍馬一頭還ることなし

この歌を読んだときも、わたしは強い印象を受けた。全国か
ら徴用された馬は三十万頭に及ぶというが、たった一頭の馬も
還つてはこなかつた。それまでは鋤を引いたり、物を運んだり
して働き、家族とともに生きていた馬たち。

教育テレビで「NHK歌壇」を担当していたときにゲストと

して伊藤桂一先生をお迎えしたことがある。「静かなノモンハ
ン」を読んで深い感銘を受けたからである。戦争を知らない世
代にあたるわたしにも、この本は、戦争というものを考えさせ
ずにはおかない力を持っていた。NHKの控室でお会いした
時、こんな悲しい目をした人に今まで会ったことはないと思っ
た。何もおっしゃらず、ただ黙って座っておられただけに。

後日、伊藤先生は『私の戦旅歌とその周辺』（講談社刊）を
送って下さった。歌と散文からなる本である。この本を読ん
で、あの方が何を見てこられたのか、なぜあんなにも悲しい目
をしておられたのが、心に錘りを降ろすように感じられると
ころがあった。

先生も「郁種」という名の軍馬とともに、二十二歳のとき、
中国山西省の黄土地帯に従軍されており、「軍馬のこと」とい
う章が五つもある。『私の戦旅歌とその周辺』は、人間よりも
何頭も出てくる軍馬の描写のほうに注がれている。「人と馬とは
言葉も通じ合うような気分になる。（中略）郁種に対する、私
の愛情も、むしろ、並大抵のもでなかった。自身の本心は、
馬に語りかけるほうが、よく聴きとってもらえるような気がし
たものである（中略）自身の心情が、浄化されてゆくように思
われた。馬のお陰である」

馬に対する先生の思いを最も端的に表わした次の文章は殊に
心に沁みる。その一節を紹介する。

「その眼はいつでも純一に素直に、死ぬ間際にもちゃんと空や
雲やあるかなしの草木を映したまま、無心にみひらかれてい
た。いささかも不満を慥えず、課された運命の道を、実に愚か
なほどの従順さで生きて行くことの価値を、遠い北辺の一角に

いて私はその眼から学んだ。そうしてそんなとき私は、私が高
間の世界をやや離脱しかけ、ふと、その美しい眼のもつ意味に
近づきかけているのを、しばしば感じる事ができたのであ
った」

このおれとお前にどれほどのけじめあるか今日もしみじみ
馬にいいきかす

一食の飼を二食に分けて与うあわれなるかもそを食うさまは
槌風という馬ありて赤痢病む友を三十余日乗せにき

伊藤桂一先生の馬は「郁種」というなままであった。何年か
を共に従軍したが、事情があつて山西省で別れてしまった。あ
の広い中国で別れてしまった郁種との三年ぶりの再会を「私の
生涯のうちで、もっとも劇的なことは、郁種とめぐり逢つた、
東の間の凝縮した時間だった、と思う」と記されている。

昭和十九年の秋、安徽省での再会であつた。郁種が来ている
と知らされて、厩舎に飛んで行ったそうである。羊羹を数本ポ
ケットに入れて、「郁、郁」と呼びかける前からこちらに気づ
いていて、寄つてこようとす。羊羹をうれしそうに食べた。
撫でてやりながら、話しかける伊藤先生の気持を郁種は分かっ
ていた。夕刻、また羊羹を持って訪ねたときには郁種の部隊は
出立したあとだったという。

軍馬と人間の、戦争という極限状態のなかでの出会いと別
れ。それは、歌にも小説にも書き尽せない愛情と悲しみに満ち
ていて、だからこそ、人は歌にし、散文に書くのであろう。

次号は小山富貴子さんをお願いします。